

目的 着衣の習慣と健康との関係をとらえようとする場合、基礎的実験データを受けた多様な条件の中で、諸要因をみることは、かなり困難な作業である。第2報では実施されている着装の実態と、第1報の病欠席との関連をみることを目的とした。

方法 1. 軽装校と普通校の観点：年代-40, 50年代, 期-向暖, 暑, 向寒, 厳寒期, 調査項目-被覆面積, 衣服重量, 対体重比率。2. 所訴時<sup>㊦</sup>と快的時<sup>㊧</sup>の観点：向寒期の1ヵ月間, 所訴(頭痛, 寒感, 腹痛など)により保健室を訪れた児童10名を対象に, <sup>㊦</sup>の皮膚温と被覆面積を, <sup>㊧</sup>のそれと比較し, 平均値の差の検定を行った。病欠席との関連性。

結果 1. 軽装校と普通校：衣服重量を年代, 学校別に表1に, 被覆面積を表2に示した。40年代A校男児が軽装であり, 向暖期出席率の低下, 向寒期上昇が特徴。50年代B校の軽装は40年代のA校のそれよりもゆるやかな出席率に効果的に働いていると思われる。2. 所訴時と快的時：被覆面積-男児は<sup>㊦</sup>81.9%, <sup>㊧</sup>87.8%で1%の危険率で有意差が認められた。女児は78.9, 81.5%で5%で有意差。平均皮膚温-男児<sup>㊦</sup>31.2℃, <sup>㊧</sup>32.2℃で5%で有意差あり女児と全体では差は認められない。<sup>㊦</sup>の環境気温は高学年で10℃以下, 低学年では14~19℃であり, 快晴の続いたあとの天気のおくずれが着装状況と相まって所訴を増すと思われる。

表1. 衣服重量(高学年) (8)

年 代	40年代				50年代			
	A		B		A		B	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
5	546	542	802	641	728	632	592	489
7	373	372	566	390	417	355	365	346
10	635	654	889	812	873	795	601	544
12	1092	1105	1312	1108	1105	1238	698	772

表2. 被覆面積(高学年) t検定

年 代	♂		♀	
	A	B	A	B
40	69.7	* 86.9	72.4	735
	*			
50	82.8	72.6	81.9	739